

## なぜキリスト者とキリスト教会は「大喪の礼」「大嘗祭」「即位の礼」を問題にするのですか？

**A9** キリスト者やキリスト教会は、イエスの復活の生命とその教えにつき動かされ、この世でイエスの弟子として生きようとしてゐる人の群れです。そのイエスがもたらしたメッセージの中心は「神の国（神による支配）」と言われます。

このメッセージは、二〇〇〇年五月に、森喜朗首相が日本は天皇を中心とする神の国と言った、いわゆる「神の国発言」とは別な原理です。イエスによる神の国は、地上のある特定の人間や制度を絶対とした人間による支配ではなく、神による支配を見出し希求していく生き方です。

すなわち、イエスの「神の国」のメッセージを、この地上の権威や制度を相対化し批判する原理として受け取り応答していくのがキリスト者なので

す。その意味で、天皇の死を特別に意味づける儀式や即位などには批判的に向き合って問題とするのです。

キリスト者やキリスト教会とは言ってもさまざまです。天皇代替わりの儀式を問題としなかったり、積極的に推進したりする人もいます。

人が神となる天皇の代替わりにあたって、天皇と国に関係する儀式を問題にすることは、自らの宗教や信仰を見直す機会にもなります。

この国の歴史を振り返り、今のあり方を問うことから自らの信仰に自覚的に応答していくことにもつながらと思います。

## Q10

### キリスト者には「見張り」の役割があるといいますが…？

**A10** キリスト教諸教派・諸団体は、先の戦争を振り返り、それぞれ「戦争責任告白」を表明しています。

その中でも一九六七年の日本基督教団をはじめ、日本基督教改革派教会（一九七六年）、日本バプテスト連盟（一九九二年）、カンバーランド長老キリスト教会（一九九五年）などでは、エゼキエル書が述べる「見張り」（三三章一節〜七節）を使い、預言者としての役割を果たせなかったことを反省しています。

またカトリックでも司教協議会会長による戦争責任の告白（一九八六年）、教会共同体の責任（一九九五年、司教団メッセージ）表明がされました。その他のキリスト教諸派・諸団体も、戦争への加担や協力に関して、同じ様な基調の告白がなさ

れています。預言者としての役割や使命を怠ったのは、国家や権力者に対して対等に発言できなかったことなのです。

この反省の上立ってキリスト者やキリスト教会は、現代社会と対話する中で聖書を読みながら、神からの呼びかけを「時のしるし」として受け止め、それを発信する「見張り」役としての使命があるとの自覚を深めています。決して特権を得て、上から「監視」することでも、悪事を働くために「見張り」をつけるということでもありません。

今の時代、社会のゆがみ、悪と不正の存在を発信する「告発者」、苦しむ人々に寄り添うマザー・テレサのような「証し人」、沈黙の内に警鐘を鳴らしたりしている人たちも「預言者」としての役割や使命を担っていると理解します。